

月曜評論

「批林批孔」と中国内政

中国の政治情勢が再び大きく流動化はじめている。この六月中旬以降は、北京をはじめ各地に盛新聞が再現して注目を集めている。北京発、ロイター電(六月十八日)によると、「政治的な、長い暑い夏」を迎えることになりそうだ」と中国の高官たちも語ったといふ。いまのところ、盛新聞は、復讐した旧幹部を批判するもの、革命委員会や地方指導幹部の「批林批孔」運動にたいする「擁護」を糾弾するもの、革命委員会の「三結合」(幹部・革命大衆・軍)の形骸化を批判するもの、若干の幹部の横暴や特権化を批判するものなど、総じて大衆の欲求不満を煽動させ、毛主席に直訴したりするものが多いが、そのなかにまじって華国鋒・党

中央政治局員への批判も程世清非公刊文献(そのもの)とも象徴的なのが、林彪の反革命陰謀の書として広く流布されたこと北京市革命委副主任への批判のよつた名指しの批判もあらわれ

注目されることである。それにしても、今回の一連の批判は、明らかに脱文革化傾向

一月には党中央政治局員にも復讐したの落雁がこのところきつた、……実際には徹頭徹尾の政治闘争は曲折をきわめ、しかも劉少奇、鄧小平、陳伯達、林彪といずれも個人批判ではな

来るのだが、その後には、つねに政治の激しい糸が絡はれていくことも、文化大革命の体験に照して明らかである。それだけに、今回の盛新聞の出現は、中国内政の一つの反映だといわざるを得ず、その帰趨が大いに注目されることである。

組のような指導機関として、今回の「批林批孔」運動の行方を左右することになる。このようなとき、最近の「紅旗」誌には相次いで、周恩来批判を思わせる論文が掲載されており、たとえは「紅旗」七四年第四号の北京大学・清華大学大批判組の論文「孔丘その人」は、「孔家この二男坊は、

また、「批林批孔」運動に関連して江蘇や広州市で流血事件も処刑などもあったらしいことが暴露されはじめた。



いノートを批判する」は、「表面上は、左傾高潮勢」をとった、……実際には徹頭徹尾の政治闘争は曲折をきわめ、しかも劉少奇、鄧小平、陳伯達、林彪といずれも個人批判ではな

七二得「紀要」であろう)などの八段論的メディアと並んで、ある場合には、「人民日報」や「紅旗」のような公式の頭

中国における盛新聞は、周知のよつた名指しの批判もあらわれ

また、「批林批孔」運動に関連して江蘇や広州市で流血事件も処刑などもあったらしいことが暴露されはじめた。

一月には党中央政治局員にも復讐したの落雁がこのところきつた、……実際には徹頭徹尾の政治闘争は曲折をきわめ、しかも劉少奇、鄧小平、陳伯達、林彪といずれも個人批判ではな

（東外大助教）